

No.18

アインテック 株式会社  
代表取締役

月山高原農地委員会  
事務局長

岡部 勝彦  
第7期生



令和4年、コロナ禍真っ只中にIT関連企業を創業し、経営を行う傍ら、庄内産の小麦(月山の粉雪)を生産し、普及拡大を目指す農業団体の事務局長も務める岡部勝彦さん。岡部さんが挑戦する事業はIT、農業共に、デジタル技術を地域社会と融合させる取り組みであり正に、地元庄内のDX最前線と言っても過言ではない。岡部さんが思い描く未来の地域社会どんな世界なのか。今回はアインテック株式会社代表取締役、月山高原農地委員会事務局長の岡部勝彦さん取材した。

## 「デジタルツイン」と地域の未来

ツインとは「双子」や「対になっている」と、「二つで一組」などを表す言葉だ。アインテックではこれを「リアル」と「デジタル」というフィールドに置き換えて達成すべきミッションの一つとしている。そのため事業の中で、街そのものや博物館、展示場などをバーチャル上に再現するというものがある。これまで鶴岡市内のバーチャルシティアや、アマゾン資料館などをバーチャル上に再現する取り組みを行っており、直近では山形県立博物館を仮想空間上に再現している。※文章で素晴らしい表現するのは不可能なので、是非博物館のHPから体験してみたい。※これらを可能にしているのが測量士時代に培った「空間を正確に認識する技術」だ。そして正確に再現されたバーチャル空間を体験することで、観光客はこの地域をよりリアルにイメージでき、実際に訪れたいと思う。デジタルがリアルな人の交流を生むのだ。

## 農業×デジタル

「耕作放棄地には、そうなる理由がある。」岡部さんは教えてくれた。アインテックのイー(データ分析力)と測量技術を活用することで見えてきたのは、勾配がまだらな畑ほど耕作放棄地になる可能性が高い。ということだ。勾配が悪ければ水はけが悪い畑となり、収穫量も自ずと低くなる。収穫量が低ければ農家の儲けに繋がらず、結果耕作を放棄してしまうというわけだ。岡部さんはドローンによる測量技術を活用し、高さの高い土を低い部分に移動し、水が流れやすい畑へと変える取組を行った。更に40ヘクタールある作付面積に使用した肥料の量と収穫量を区画ごとにデータ化。最適な肥料の量を算出することに成功した。こうして生産されたのが、「月山の粉雪」だ。驚くべきことに肥料の10%削減と収穫量200%アップを達成したという。データ収集力と分析力によるコストカットと収穫量の大幅増。これらの取組みにより、国が地域農業の将来像を明確化し、地域農業を維持発展させるために策定を義務付ける、「農業地域計画」における、

県内唯一のモデル地域に選定されている。

## 起業へと至る契機

大学卒業後地元元の測量会社に就職し、土木・建設に関するコンサル業務に従事した。そこで測量業務にも関わり現在のアインテックの基幹技術でもある、「GIS」(地図とデータを融合させ重ね合わせて表示することで、分析や管理を行う地理情報システム)と出会った。土木・建築コンサル、測量に関する技術を着実に習得し、キャリアを蓄積していた折、致道博物館で開催された「アマゾン」展を訪れた。「別にアマゾンにそれほど興味があった訳ではないですが、凄く良いと感じました。」そう話してくれた。しかし、数年ぶりの開催だったこともあり、想いを込めた準備で来場者を迎えるはずだったそのイベントは、「コロナ蔓延により僅か2日で打ち切りとなった。」「もったいない」「インフルにそう思った岡部さんは運営側と「コンタクトを取ると」「行動」に移した。運営側との会話の中でZOOMを活用して「バーチャル展示会」を実施できないかという話になった。岡部さんは自らが有する知見と技術をフル導入したボランティア活動で、それを実現させてしまった。

そして、その体験が「地域社会をより良くしていくために、自分の培ってきた技術や知見を活かせる」という確信へ変わり、岡部さんは起業を決意したのだ。

## 若手経営者塾で学んだこと

若手経営者塾で印象に残っているのは、鶴岡シルク大和匡輔氏の講義だ。ファストファッション等が台頭する時代にあつて、シルク素材に本当にニーズがあるのか。最初は半信半疑だったという。しかし大和氏はその価値を信じ「行動」し続けることでサムライシルクのブランドを確立した。信念を貫き続けることの大切さを学んだという。そして、その他にも講義でインスピレーションを受けたことがあつた時は、社内でのディスカッションを都度行っていた。講義の場だけではなく、若手経営者塾を自社の経営に生かし切った素晴らしい事例である。

観光と食(農業)。これらが庄内の地方都市としての大きな強みであることは疑いようもない。岡部さんはこの魅力をデジタルとリアルを融合させることで高め、広げようとしている。

インタビューしていると、岡部さんにはデジタルの世界を通して、私たちより少し先の未来を見ているのではないか。とさえ感じた。

